

蜘蛛

清水一美

蒼を仰ぎ碧にひとり佇む

葬送は風の間あわいに白く道を拓く

明け初める夜の端境の光芒

目覚めの眼差しを深閑は落ち

疾く光は秋の高い朝あしたに闇を沈め

玉響の水玉に 黙もだし目覚める

波の拡がる紋あやを見送る眸の

水底を見上げる蒼白い忘却から

水面に漲る元始の波動を

地母うぶし産す四六億年の黙示へと

落葉の虚無を手繰り 銀糸の

降下かたちに待つ契約の容

同心円に千手を翳す八肢は

待ち明かす夜の炎心を

北辰に結い

星辰の軌跡をなぞる夜の末

銀河を編む

中有は明らかに澄み透る

無間 立ちほだかる非有にまなかいの

帰性するわたくし以前の相似に立つ

上昇 渦巻くあらゆる重力に勝る

貪欲な眸 その視源に捕らわれ

言挙げせぬ祈りに 生あれ来し

増幅するわたくしの揺らぎ

朝に記す餓鬼の眼差しは
夜の憶に地母を焼く焰
わたくしの始しに贅ぜいを象り
黄泉還る 肌透く月の辺り
蜘蛛とし赤き空に糸を紡ぎ
明かし雲の偉匠を仰ぎ
風に糸を張り跳躍を試みた日
天あめつち 地は薄青い水素の炎と消え
渴かつきは青い思念を生み
生まれぬ先のすがたを追う
水と火の同期する紋に
豊穰を受け屠られる先の母
その血の系譜に饗かうけ
風に狂える一差しの舞
水煙は天へ噴き上げ
分光するその階調を昇る
わたくしの視
鉛直に沈降する樹影
倒立する天に広がる
充溢する空くう 蒸散する
わたくしの死
闇よりも深い光は
想起する形象に佇む碧
預言のように仁王立つ蒼
捻れた円環は閉じ
無間に開かれる
私の想念は
今朝の曙光に塗れ
木霊する天末を追う波状の
遁走曲

干渉する音の間
和合する音階を踏み鳴らし
不協する和音を振り散らし
収斂する延音記号の果てる末
垂直に屹立する沈黙を受け
否認を告発する鶏鳴響く
場 立ち尽くす時制に
意味を脱ぎ捨てた事象は
輪郭を研ぎ澄まし 鏡なす
わたくしの出会いを刻む
燔祭に雲の燃え盛る 甦りへの序
逆巻く黄金が青銅へ沈降する間
深く地に眠る贄ら 地母の末
閉じた眼がわたくしの眼差しに開く
収束していく視を覆う銀河団
その眩い旅路に打ち立つ贄ら
環状を祈る列柱の最中 とりよろう
屹立する円柱を遡行し
定まらない死を循環に送る
呼ぶ声は一条の光の糸を繕り
遙か光の集まる水の記憶を結い
一三七億光年を廻る波光を剥がれ
孤独を下る 一縷のわたくし
始めを紡ぐ出会いに隠れる
朝を基層する無辺の空
その目覚めに落ちる
無為を枯葉は辿る
その奇跡が刻む風の紋を
焼き付けよう 眼差しのように
貫く唱導は容認の全しことば

在れ

その震えを一縷に捉え

銀河を編む

やがてこの身は子らの贅となり

腐身を晒そうとも 与る

わたくしは在るものの

継承

その光儀すがた